



連
俳切紙
秘傳抄
竹苑抄

伊地知文庫
文庫20
241



三分記

文庫20
291

一首尾病

一懐紙

一記思病

一 二日不日 二 三不連

柳在人多く哥連誦等小病此名紙背所謂
曰病八病等有之竹園抄亦云く記りて念
連誦^{二音}滑舟才一の用不十の一證哥書紙傳

才一親句の事

一 親句の字は讀

ムフフ ナカシ シタシム
ムシシ ミツボラ

は讀是れ也よく

思案あるべし 親句の又二行有一小句の親句

二小句正乃親句のひびきのの親句又二行も五音お也

五音も色し人間て云五音お也と云 一イウエシ

ラリルシロ付むに何も作もて者如哥也

胡震草此猶もたてぬと云 隨書凡の親の音付

は奇此親の事と兼乃も也 一云ムモノ五音に

と此ノと云から一の夕ト夕千ツ千トし 以れし哥

ありしあめ書

祝言、おの白腰、おの白腰、おの白腰

又おの白腰、おの白腰、おの白腰、おの白腰

保養く、おの白腰、おの白腰、おの白腰

定らく

おの白腰、おの白腰、おの白腰、おの白腰

おの白腰、おの白腰、おの白腰、おの白腰

おの白腰、おの白腰、おの白腰、おの白腰

おの白腰、おの白腰、おの白腰、おの白腰

おの白腰、おの白腰、おの白腰、おの白腰

おの白腰、おの白腰、おの白腰、おの白腰

おの白腰、おの白腰、おの白腰、おの白腰

おの白腰、おの白腰、おの白腰、おの白腰

おの白腰、おの白腰、おの白腰、おの白腰

おの白腰、おの白腰、おの白腰、おの白腰

おの白腰、おの白腰、おの白腰、おの白腰

おの白腰、おの白腰、おの白腰、おの白腰

おの白腰、おの白腰、おの白腰、おの白腰

おの白腰、おの白腰、おの白腰、おの白腰

おの白腰、おの白腰、おの白腰、おの白腰

軍陳等れあり。後、三、二、一、外、誠、も、三、也。
一代、小、二、交、計、の、用、す、し、度、の、い、と、も、好、み、好、み、
と、何、中、の、あ、し、り、め、し、り、と、し、帝、も、好、み、中、の、方、の、あ、る、
の、り、あ、る、の、り、の、あ、の、親、御、基、に、宣、意、け、代、
秘、と、よ、あ、る、と、い、れ、三、條、西、の、言、分、は、中、の、り、あ、る、
の、り、あ、る、と、交、し、又、し、年、の、の、り、小、二、小、の、り、
あ、る、中、の、り、あ、る、と、い、れ、好、み、に、れ、り、方、の、あ、り、
中、二、計、の、り、あ、る、

右、云、御、言、と、あ、る、を、あ、る、と、い、れ、し、ま、あ、る、あ、る、い、れ、ん、に、此、
ら、れ、ま、ぬ、の、り、あ、る、と、い、れ、し、り、あ、る、と、い、れ、し、り、あ、る、
連、り、あ、る、と、い、れ、し、り、あ、る、と、い、れ、し、り、あ、る、と、い、れ、し、
と、云、秘、の、り、あ、る、

小男麻代、中、の、た、ら、と、辨、文、て 宗、長

小男麻乃、声、文、と、也、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、
た、ら、う、中、に、云、名、ハ、中、三、人、事、れ、極、し、宗、碩、の、

中、三、人

夕月、東、中、の、り、あ、る、に、此、秋、文、て

是、し、夕、月、の、り、あ、る、と、い、れ、し、り、あ、る、と、い、れ、し、り、あ、る、と、い、れ、し、

藤、原、の、り、あ、る、と、い、れ、し、

長、平、の、り、あ、る、と、い、れ、し、り、あ、る、と、い、れ、し、

白、雲、と、い、れ、し、り、あ、る、と、い、れ、し、り、あ、る、と、い、れ、し、
昌、記

長平此の地少く旅くさるる山崎桑平の
才この世やちそく又名人とてしとくやする
たしうたはあきし事しとて神に此の地講の
とんじり又去人此地遊ふあはらにあり云
帰居かいつ友此声はて
を此比迄守日の祝して

たとく少はめあしひとせぬれ才こ
たやれ短尺ひうふあり入ふ
かれのうまめし能く山崎をけ才之向れは自
新の
アカサタ十九
下のウクスツ

才之六條の事

一云儀の中へ賦のうと云ハ一首此のふん此
有奇し賦のうと云ハ一首此のふん此
はたありさして一首のゆふ事と能ふをし
よめられうしあむしとて日け賦の字標
の謂は事あ式目に委記せり

才之凡條の事

と云十のうたはけ長き竹園妙ありしと
能くは更ま十あり才之十御し

才之四條の事

辭之ハ切音をた

又津尔やと云て是より初めくして部名にして以て
さく此部名

種より初め津波なりと

是き字をめぐりて分るる所ありぬる所ありと
然るにこの字より一代一白(但し)何或目ノ
所名より今何名人とてしるる所ありぬる所ありと
あれとらんと申す一字(但し)何或目ノ
見ゆぬれりてよとて初め

是き字初めなり(但し)何或目ノ

初めありて月をのりて

さるる所ありぬる所ありと

云り何或目ノ代則自證ありて是外ありと

又津波

この字より初め

と愚自伝の師

初め此より初め

免角時名此より初め

初め 初凡 何或目ノ

皆初より初め

字必す意にたす

あれと平白なるだけ

雨は津波の字より初め

初め

九祈禱

一 足越と独りりしむ才一に真人の人氣不有者
其その二は誰と知る事しるふ方母之句作り
病なきやふし下し潤きをなれた神のほり
神の面がしすす下婉く潤きを也

才十進名

一 尋詞送り字形留并文字作り等用し也
も人一進名一形を何上包し其字包
平人向前の方く其地をく也

才十一祈禱

一 祈禱のあり等と跡のありは是くくく親の
因らりて子細跡此語はありたりと云ふ也
人其ありたりと云ふは其まゝに其心と申すは
三を親のなり

才十二呪咀

一 古の切字小立祈母と首切明切と云はるは
才一と云ふは文字小立花やちち花やと云ふは
ちと子言と云ふは花を解し花を解しと云ふ
花やちち花やあはれ又花や花月や名小
か花如き事解し又古文字七文字此祈合と
名は右二名と首切と云ふ又明切と云ふ中其文字
其は字なり

才十三祈禱

一武家方三つ一もふれとていふはたゞ

大平記亦千叙破之城あり寄り

ふきかけて明の父人曰く山城

白地地取しを中より師宗死とてふきかけて
勝多と成りて子と宗と首切と云すけ親白と
二石取らば

鼠や花我かゝるなる流

少白より鼠やと疑ひ留らんと留す白地縁
又言建輝とありと城中はまきとて一道城人
寄りてふきかけて

ふきかけて明の父人曰く山城

白地ありと云ふ在れ字ありて此他は相
縁と云ふ御軍亦家子利を失ふると細也家の
集小自守此有智と云ふ云々此は又此は
明徳と得りては新田公を白東船よる舟

新田の今日此軍亦名なり川

是亦少し絶るるが下前代集亦此他も絶れ
とくは新田のころの力も少くは
名十二又子ノ也 季此は事あり者い毎一并ふ
切字もそそむ白あしかなること人けり
中切字一丈変此ありと云ふは京此の
かゝらば

晴らば此はと居る此や其祥しと申候事
子も其祥しと申候事旅軍下向此法と申候
又其祥しと申候此法と申候此法と申候
名言と今所の人亦なすと申候其祥しと申候
あり此法と申候

信濃守重忠あり

方山やちひさけに此山は
是の常系足此山は此山と申候
之れは山は

四知日向あり

何れとあめ下と申候

是の洞伏の人なまえ智度庵の福きく
今此まともあめ此の也アサタ十二ヤラし
魚尾子向此尻あし切あり
ゆり尻を切あり

家康の国東法新傳あり

三ヶ所を新傳と申候
志らるん此も此も此も此も此も此も此も
下本におも此山は此山は此山は此山は
あつたし此山は此山は此山は此山は
私乃此山は此山は此山は此山は
家康の所と申候此山は此山は此山は

一茶と梅の事と云うは方外此茶と云う梅と
志此茶梅を事と云う意にあらず此茶と云う

茶の何し人此の

茶と云うし此茶と云う此茶と云う

茶と云うし此茶と云う此茶と云う

良徳

茶の何し人此の

茶と云うし此茶と云う此茶と云う

良徳

茶と云うし此茶と云う此茶と云う

茶の何し人此の

茶と云うし此茶と云う此茶と云う

良徳

茶の何し人此の

茶と云うし此茶と云う此茶と云う

茶と云うし此茶と云う此茶と云う

良徳

茶の何し人此の

茶と云うし此茶と云う此茶と云う

茶と云うし此茶と云う此茶と云う

良徳

茶と云うし此茶と云う此茶と云う

良徳

茶の何し人此の

茶と云うし此茶と云う此茶と云う

良徳

こころにトハ連声イキテテハ高き光高き
フシツノ日暮しとてし徳知のあふけん
あふけんのこころは月ひゆる友今入らん
水賢あきら文ノ詞のめり

心廣く帝のゆゑの乳を給ふ

らば

お例のてしとてくを自ま此の

あは

曲と川流のよき辰とけけ

大利

大なるのて人字此詞の甲乙のくさるま由
かゝるをゆゑのれれはと福也此社を言十二
又子ノこけけ此まともか例のまかてしとて

まきらのまきれまをてあふて東之れ曲
川此のまきれまを辰とのしけけを
あふてかれれは社まといあふて

心

琴

竹園 業

竹苑抄

- 一 可憐な事
- 二 親誦の事
- 三 形正の事
- 四 定可の事
- 五 枝舞の事
- 六 土風折の事

- 七 射詞の事
- 八 六儀の事
- 九 也子折の事
- 十 懐紙の事
- 十一 於名物巻の事

哥病の事

採入多し此方小病の事と云々云々此方病の事
 八世小治と云々を代母と云々多し此方病の事

二子に方二王始乃中申み射し入娘の女を
下の向ふとつとつとあつた

柳をたけし子をもくをるあまきるまのたけ
そのよ中と射まらじむちとちをを射ま

梅衣子よりしはし一のふれりりあつた
そのよ中と射まらじむちとちをを射ま

上のとつとあつとくつとあつとよつとあつ
花をしとつとあつとくつとあつとよつとあつ

日やのぬきやあぬきなりぬきなりぬき
そのよ中と射まらじむちとちをを射ま

今とあつとあつとあつとあつとあつとあつ
けにた射まらじむちとちをを射ま

さるさるあつとあつとあつとあつとあつ
浦之邊にあつとあつとあつとあつとあつ

射のこもあつとあつとあつとあつとあつ
三朝の浦の向ふとつとつとあつとあつとあつ

曰六段の事さふやとつとつとあつとあつとあつ
柳衣子二種の大妙なりあつとあつとあつとあつ

柳のさふはあつとあつとあつとあつとあつ
一 鳥さるさるあつとあつとあつとあつとあつ

さるさるあつとあつとあつとあつとあつ
銀の柳衣子さるさるあつとあつとあつとあつ

いふこと云り相女野良の養食蓬に毎
きこと云り

三以乃云うと云いながらしく音く物と二つりて曰
お女とたかきまの繼

ちよと相女を女おれ起してたかきまのり
物も海にむきまをたかして今おれり

と云おれ物よたかきまのり

は身そふとく音く物と二つりていはれ
ゆりとも女まうは名別てぬは身はゆたか
かゝまといはれぬをんはまうとく音く物
たかきまのりてたかきまのり

我の海をたかきまのりたかきまのり
子非乃音くまうと云いながらしく音く物と二つりて曰
まうと云いながらしく音く物と二つりて曰

ゆりとも女まうは名別てぬは身はゆたか
かゝまといはれぬをんはまうとく音く物
たかきまのりてたかきまのり

是形中音のり

日やあまをまうは名別てぬは身はゆたか
まうと云いながらしく音く物と二つりて曰

まやあまをまうは名別てぬは身はゆたか
まうと云いながらしく音く物と二つりて曰

おまうと云いながらしく音く物と二つりて曰
おまうと云いながらしく音く物と二つりて曰

少しきぬくも

七つに三つは秋は葉のうらみ金もよみこころのさびしき

又此作
三つはよみこころのさびしき金もよみこころのさびしき

とあはれぬも
三つはよみこころのさびしき金もよみこころのさびしき

又の作
あはれぬもやうなうたはれぬもやうなうたはれぬも

とあはれぬも
あはれぬもやうなうたはれぬもやうなうたはれぬも

けらぬらにぬれぬもやうなうたはれぬもやうなうたはれぬも

あはれぬも
あはれぬもやうなうたはれぬもやうなうたはれぬも

そのさびしき
あはれぬもやうなうたはれぬもやうなうたはれぬも

あはれぬも
あはれぬもやうなうたはれぬもやうなうたはれぬも

とあはれぬも
あはれぬもやうなうたはれぬもやうなうたはれぬも

あはれぬも
あはれぬもやうなうたはれぬもやうなうたはれぬも

七
あはれぬもやうなうたはれぬもやうなうたはれぬも

あはれぬも
あはれぬもやうなうたはれぬもやうなうたはれぬも

あはれぬも
あはれぬもやうなうたはれぬもやうなうたはれぬも

あはれぬも
あはれぬもやうなうたはれぬもやうなうたはれぬも

丑之月百首小巻の... 数事の音に... 可也

あはれ... ちのひ跡... のまうた... せぬ... あま... せぬ

又... 申...

... 院... 双文...

... 女... 此... 女... 此... 女...

男は師のこゝろに事す

尤世海序のこゝろをばいひつゝみは子程のこゝろ

訪りて紅糸をふくは集りてるは子程のこゝろ
ふたすすすすおん人れとふまかけてるもあふ
とちよひけすこゝろの氣をあらとちあひひ
たもよひけすこゝろの氣をあらとちあひひ
はれおのこゝろも氣をあらとちあひひ
やまをれの首上文を定て文章のたゆ
は子程のこゝろを定て海師のこゝろを定て
海師のこゝろを定て海師のこゝろを定て
海師のこゝろを定て海師のこゝろを定て

こゝろのこゝろを定て海師のこゝろを定て
海師のこゝろを定て海師のこゝろを定て

余氣のそ可掛

明神
人々

花組
草子香炉
花組

上
下

寺

講師

講師

女房筆中

上篇若見
下篇若見
作者木

上篇若見
下篇若見
作者木

余氣のそ可掛

相会を席よりあはれをたてつゝと知てあるこ

てにえたり〜

方ののほしきやに別り懐中〜

理の〜

ゆらか母なり〜

た〜

言はれ〜

おふす〜

ゆ〜

あ〜

赤〜

あ〜

〜

お〜

〜

ふ〜

お〜

〜

〜

〜

お〜

〜

言集ふと書集始くし旅の記と
号しむるの秘を也

追か

ヤニハラツ
七日七夜

七万三千三百六十日シム

十四字

十七字

三合記

十シケ
良菜
竹葉

全



